

■書評 Book Review

『海辺のアポリア』を読む

『海辺のアポリア』 邑書林、二〇〇九年一月二十日刊、二五〇〇頁（税込）、ISBN978-4-89709-617-9

Rei HATANNO

羽田野 令

『海辺のアポリア』（邑書林二〇〇九年）は、安井浩司の評論集である。彼の文章を読めば彼の俳句を読み解く手掛りが何かありはしないか、そんな期待で本書を手にしたが、読み始めるや否や、それは大いに裏切られることになると思った。安井が見てきた俳句の風景がどのようなものであったか、そこに何を見出し、俳句をどのように考えてきたかという軌跡が示されているのだが、浅薄な知識と思考方法しか持ち得ていない者にとつては、同じところをぐるぐる巡るばかりであった。本書の中を右往左往しているうちに、新興俳句に対して「渴仰というにふさわしい」継承の志を持った高柳重信や、一九五〇年代に特異な切口を示した加藤郁平へ向ける安井の視線から、安井自身を彼等にくくものとして、鋭く自らに様々な問いの切先を突き付けてきたことや、俳句を作るといふ行為の中で、常に俳句形式というものを問い続けてきたということが少し見えてきた。

高屋窓秋の「頭の中で白い夏野となつてゐる」が、いくつもの文章の中に出てくる。この句は、昭和七年『馬酔木』一月号に発表された窓秋の連作の中の一句である。虚子の提唱する「花鳥諷詠」「客観写生」という、目に映る景を写し取るといった方法とは全く異なつた、言葉の世界をひらいたものとされている。

大正時代に、俳句以外の文学のジャンルは西欧的なものの流入により近代化されるが、俳句は昭和初期のこの時を待たねばならなかつた。「言葉が言葉を生み、文字が文字を呼ぶ」とは、昭和十五年『馬酔木』五月号に書かれた窓秋自身の言であるが、それは単に言葉が実際の物にあてたものとして機能するだけではなく、書かれた途端、言葉の世界という虚構の中で働くということを行っているのだと思う。それこそが文学的営為である。

この句に「現代俳句の曙光を見る」安井は、それだけでなくもつと大いなるものも見ている。「この一句によって、私達に見えたものは、今日の時空量に等しい神のときであり、そこを、はじめて俳句形式を通して不可視の彼方に読んだのではないかという気もする」と言う。また「俳句形式に対して、高屋窓秋が関わった最大の一点は、《原始的なもの》がこの形式の虚構性を大胆に横切つたことである」とも言う。

ここで俳句形式ということが語られているが、俳句形式とは、俳句とは違うものとしてこれ以後も述べられる。戦後『露子』によって多行形式の句を発表した高柳重信については、「重信を論ずることは、俳句形式を論ずるに等しい」とも言う。最後の三つの論文が重信についてのものであるが、他の文章の中でも加藤郁平と並んでよく触れられている。というのは、「頭の中で白い夏野となつてゐる」を現代俳句史の端緒とし、極北に加藤郁平、もしくは、高柳重信以後としての加藤郁平を置くからである。

発句が独立して以来、五七五の形式を支える共同性ゆえに存続してきた俳句形式。重信の多行形式はそれへの反措定と捉えられることが多いが、安井は「高柳にとつて、来し方の俳句に

対して反・俳句を掲げたわけではなく、自らの認識の中に俳句たらんとして書こうとした（俳句）作品以外の何物でもなかった」とする。

また安井は、俳句形式の確定要素の一つに「私性」の問題があるとし、「加藤郁平においては、私性の否定として、遂に「不在」が語られる」と言う。私性の不在とは自我が限りなく他者として捉えられることであり、不在の中に他者を所有した句集として第二句集の『えくとぶらすま』を挙げる。

冬の波冬の波止場へ来て返す
『球体感覚』

昼顔の見えるひるすぎぼるとがる
『えくとぶらすま』

この姿見に一滴の海を走らす
『えくとぶらすま』

弁天を抜けたあたりでみずてんのふらここ
『えくとぶらすま』

第一、第二句集から二句づつ抜き出したが、『球体感覚』では、五七五の句が多くあるのに比して、『えくとぶらすま』には一句もない。「その後の加藤郁平は、難解な霊的乱調を中心に据えて『形而情学』『牧歌メロン』へといわゆる虚構から文体へと（虚構）をねじりあげる」と安井は言う。

牡丹ていつくに蕪村ずること二三片
『牧歌メロン』

句じるまみだらのマリアと写楽り
『牧歌メロン』

『牧歌メロン』のこれらは、言葉が言葉自体として舞う感覚と、いったらよいだろうか、パロディーも遊びも含めて自在である。これを安井は「断崖」とし、これ以後は何も無いという。

俳人達についても安井は厳しく言い放つ。「いままでの俳句の世界に対して何やら新しい一行でも追記したか、あるいは俳句形式のために何ごとをがんばったか、という観点に立って私なんか読む癖があるから……どれもこれも胡散臭いのである」と。

この発言から翻って、安井自身自らにそれを課しているのだということがわかる。

作家論に、夏石番矢の『真空律』についてのものがある。その中で語と語の間のかたくりのことが語られている。かたくりとは、俳人が無意識的に物と物との関係にかけてしまうもので、俳句形式において繋ぎの役目をし、俳諧的な「妙」を作り出すものであるという。『真空律』においては、このかたくりが全くかかってなく、「言葉が生きている」と言う。言語が熱く飛び出しているのは、表現の本質を探ることであると評価する。そして、勅語を模した「王語」が「神語化」する可能性を、芭蕉の「奥」への言語の旅や、安井の地方の伝承のイメージと交錯させ「キリストの弟を追って」という題が付されている。

作家論で驚いたのは、寺山修司についてである。寺山は私達の世代にとっては、高校学習雑誌の短歌の選者をしていたことから、もう少し下の世代になると教科書に載っていた歌人だということもあり、短歌の分野では結構崇拜者は多い。寺山が「チエホフ祭」でデビューする以前から交流があった安井ならではの言葉であるのだが、「寺山修司の俳句一蹴は、私にとって桑原武夫の第二芸術論以上に……痛烈な批評でありえた」とし、寺山修司は、「時代の中なる矛盾格Ⅱ道化だったのではないか」というのが私の結論である。」と、とても厳しい。

俳句形式は散文的羽ばたきをするのか、俳句形式とは文体でしかないのか、俳句を構造として捉えることは……、等安井の語る言葉を浴びつつ、更なるアポリアの中に私は蹲っている。